九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国文学研究における理論の政治学（ポリティクス）

中里見，敬
九州大学大学院言語文化研究院 ： 助教授 ： 中国文学

http://hdl.handle.net/2324/5597

出版情報：pp.1-2, 2001-04-21
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

2001.4.21

中国文学研究における理論の政治学(ポリティックス)

中里見敬

0. 導入：「文学」というディシプリンの危機

現在、九大比文では文学不要論が公然と語られている。その背景には、欧米で文化研究の理論を学んだ社会学・政治学・文化人類学などの研究者が、人文・社会科学の理論的枠組みを先導し、またかつては文学研究の分野と思われていた領域でも活発に発言していることがある。近代国民国家とともに、各国文化の精華(エッセンス)（国粋(ナショナル・エッセンス)）として創出された国文学(ナショナル・リテラチャー)研究は、近代批判の流れの中で、文化研究の一下位区分へと解体・吸収されると同時に、一方でごく一握りの職人的な中世的文献学へと後退していくのだろうか。

1. 理論の展開：作品、テクスト、言説

構造主義［结构主义］structuralism

体系内部の閉じた構造の記述。ソシュールによるラングの共時言語学がモデル。

文学では、作者・社会・文学史を排除し、テクストの構造分析に特化。マルクス主義的反映論との決別。

「作品」［作品］から「テクスト」［文本］へ。

ポスト構造主義［后结构主义］

上のような構造を成り立たせている権力関係に踏み込む。フーコーの言説分析がモデル。

文学では、テクストと社会・歴史との開かれた関係を問う。

「テクスト」から「言説」［话语］へ。権力装置としてのテクストの作用を指して「言説」という。

男／女（ジェンダー）、西洋／東洋（オリエンタリズム）、五四文学／鴛鴦蝴蝶派（中国近代文学史）

構築主義 constructionism ——人文・社会科学全域への影響——ジェンダー、植民地後(ポスト・コロニアル)など、従来の政治学・経済学・文学などで放置された差別＝権力の関係を、言説分析を通してあばきだす。理論の共有、脱領域(インターディシプリン)研究。　↔ 主体、本質主義、客観主義

参考文献：上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 2001
上野千鶴子「差異の政治学」（『岩波講座　現代社会学　第 11 巻　ジェンダーの社会学』岩波書店，1995）

2. 理論と大学アカデミズム、ペダゴジー：知の再生産

研究会
採用人事
博士論文
大学出版局
ペダゴジー

参考文献：ブルデュー『ディスタンクション』（1990）、『再生産』（1991）、『芸術の規則』（1995）、『教師と学生のコミュニケーション』（1999）　以上、藤原書店刊。

3. 理論を実践する

3.1. 国語学の実践例

鈴木広光「〔書評〕安田敏朗著『植民地のなかの「国語学」時枝誠記と京城帝国大学をめぐって』『帝国日本の言語編制』」(『国語学』197 集、国語学会、1999 年 6 月 30 日発行)
http://www.linelabo.com/koku9906.htm

九〇年代に入ってから、ナショナリズム論やポスト・コロニアリズムの隆盛にともなって、近代日本における「知」の起源をさかのぼり、所与とされていた事柄の恣意性とそこに隠蔽されてきた政治性を暴き出す試みが、思想史の分野を中心に盛んに行われている。俎上に載せられた学術は柳田民俗学や国史学などいろいろあるが、「国語学」もその例外ではなかった。否、公にされた文章の数からいえば、「国語」概念の形成とそれをアカデミズムの側から支えた「国語学」こそ、この文脈で語られている最も中心的なテーマであるといっても過言ではないだろう。それは、これまで自明のものと考えられてきた「国語」が、国民国家形成の不可欠な構成要素として恣意的に構築され、その恣意性ゆえにすぐれて政治的性格を帯びた概念であったことが、先の思潮によって、きわめてわかりやすい形で提示されたからである。

(中略)

言語のように一見、政治とは無縁に見える対象(「X語」という形で囲いこまれた言語は、それ自体すでに政治性を帯びているのだが)を扱う学問も、それを取り巻く状況から全く自由であることはむずかしい、ということを自覚すべきだと思う。そうでなければ、繰り返し再生産され続ける「伝統」や「特殊性」という名を借りた排他的言説や「国際化」のかけ声とともに忘却される過去の歴史への無自覚に対して、それらを乗り越えるための視座を失うことになりかねない。

この書評で取り上げた二冊の本が投げかけるもの、それは「国語学」という制度のうちに安住してきた私たちにとって、とてつもなく重い。

3.2 文化人類学の実践例

菊地暁「世界のかたすみでブンカを叫んだのけもの:あるいは太田好信著『トランスポジションの思想』をめぐる断想」(『日本学報』19 号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室編集・発行、2000 年 3 月)
http://bun110.let.osaka-u.ac.jp/kenkyu.zassi/gakuhoukikuti.htm

1980 年代以降、従来の人類学のあり方に対する根底的な再検討が推し進められるようになった。いわゆる「ポストモダン人類学」と呼ばれるこの動向は、外的には脱植民地化や冷戦体制の崩壊といった世界システムの構造転換に規定され、理論内在的にはフーコーやサイードの議論を援用して導入された民族誌のテクスト論的分析に支えられてきた。この動向に先鞭をつけたマーカス&フィッシャー『文化批判としての人類学』(1986)は、人類学が直面している問題を「表象の危機」と規定した。すなわち、かつて植民地宗主国の人類学者に一方的に表象されるままの存在であった人々が、世界システムの構造転換にともない、自らの手になる表象を求めて行動するようになり、そのことが既存の人類学(者)のあり方を根底から揺さぶっている、という認識である。このような問題意識の下、人類学の根幹をなすとされる民族誌(ethnography)という学的実践が、精緻なテクスト論的検証の対象となり、その結果、それまで客観的・中立的と考えられてきた民族誌記述が、実のところさまざまな政治的契機(politics)と修辞的契機(poetics)に満たされていたことが、白日の下に晒されるようになった(マーカス&クリフォード 1986)。